

日本と南洋群島の互助慣行の比較

——パラオとポンペイを中心に——

流通経済大学 恩田守雄

1. 目的

本報告の目的は田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助慣行について（恩田,2006;2019;Onda,2013）、南洋群島と比較し相違点と類似点を明らかにすることである。

2. 方法

上記の目的を達成するため日本と南洋の一般および互助関連の文献を精読し現地調査を行った。2018年8月にパラオ諸島（共和国）、2019年3月にポンペイ島（ミクロネシア連邦）の農村漁村で聞き取り（半構造化インタビュー）を実施した。既に韓国（第85回報告）、中国、台湾（第87回報告）を調査し東アジアの互助慣行として発表した（第88回報告）、本報告はフィリピン（第89回報告）、インドネシア（第90回報告）、タイ（第91回報告）という東南アジア研究の延長上にあり、互助慣行の移出入という点で日本（南洋庁）が統治した南洋群島を調査地として選定した。

3. 結果

パラオとポンペイの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しているが、村落ではまだ伝統的な互助行為によるつながりや絆が見られる。特にパラオでは葬儀で故人の借金を親族のみならず地域住民が負担するという慣行（omengkad el blals）があり互助ネットワークが機能している。パラオの農村では日本のユイにあたる直接の言葉は見当たらないが、近い言葉に mengerakl がある。土地が小さく家内労働で処理できるため互酬性はないが、この言葉は草刈りなどの共同作業で使われ、順番に集団単位で労働力を回していく日本のユイ組の作業に近似する。ポンペイではクミアイ（組合）という言葉で共同作業を行う。金銭的支援として小口金融のムシンがパラオとポンペイで普及しているが、これは日本人が伝えた無尽で利息を求めない相互扶助的な性格が強い。婚葬儀ではパラオは omadek で弔慰金を出し、ポンペイは sawas という言葉で喜怒哀楽をともにする。

4. 結論

パラオでは klaingeseu、ポンペイでは sawaspene という相互扶助の言葉があり、地域住民の一体感が維持されている。その一方で調査した農漁村では共有地が見られず共有意識は希薄である。困窮者への救済では公助や自助への要請が強くこれは急速に進む近代化の証左と言える。パラオでは海岸の清掃でキンロウハウシ（勤労奉仕）、またポンペイでは共同作業で既述したクミアイという言葉が使われ、日本的な互助慣行が浸透している。戦時下の強制労働の残滓とは言え、目上の人に対する礼儀や責任感の付与など日本の慣行が土着のそれに加わる二重構造を形成したが、戦後それらが従来の互助ネットワークに同化融合することで新たなコミュニティが生まれたように思われる。今回の知見を踏まえ東アジア、東南アジアと比較し南洋群島に通底する互助慣行の解明が今後の課題である（科学研究費助成事業＜学術研究助成基金助成金＞：平成27年度～31年度、基盤研究C、研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」、課題番号15K03860、研究代表者＜個人研究＞恩田守雄）。

<参考文献>

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。2019『支え合いの社会システム』ミネルヴァ書房。

Onda, Morio. 2013. 'Mutual help networks and social transformation in Japan,' American Journal of Economics and Sociology, 71(3):531-564.